

沖縄日食 (1987年)

秦 茂

9年前、1987年9月23日の金環食はソビエトのカザフ地方の日の出と共に始まり、中国の砂漠地帯を横断して上海付近から東シナ海に抜け沖縄の中部を通して南太平洋上で終わる。日本を通る金環食は珍しい天文現象で、中国、沖縄にこれだけ天文ファンが集まったのは、これ以前では29年前の1958年4月19日の種ヶ島、八丈島であり、この機会を逃すと次は2012年5月20-21日の本州の太平洋岸を通る金環食まで待たなければならないという事情によるものであろう。

旅行業者は台風の心配が少ない中国・上海の近郊と沖縄へのツアーを計画している。沖縄では台風の危険の他にハブについても注意を払う必要があると聞かされていたが、私は迷うことなく沖縄に行こうと思った。東京から沖縄までは僅か2時間20分の距離である。'日食遠征'というには沖縄はあまりにも近い、金環食の一年前、1986年に観測地の下見に出かけた。那覇市内、西海岸(日食中心線付近)、海中公園、キャンプハンセン、平和記念公園と歩きまわった結果については日食情報1986年No. 3、金環食への旅(沖縄)に書かせていただいた。本島全域には電車が走っていないので、すべてバス旅行である。

金環食帯の南北限界線は沖縄本島をすっぱり包みこんでいるから、周縁減光の光電測光などの中心線上の観測にこだわらないなら、本島内の何処でも観測地が設定できた。

ところで天文の話題からは外れるが、最近の新聞紙上では毎日の様に沖縄基地の問題が取り上げられている。しかし、その問題の根底には沖縄人の本土人に対する、否、日本政府に対する不信感があるのではないだろうか。更に脱線するが、沖縄の辿って来た歴史と敗戦前の沖縄の悲劇について書かれた朝日新聞の記事の切り抜きを挿入させていただく。

沖縄の歴史

昔、沖縄が琉球と呼ばれていた時代には、この土地は日本とよりは中国との交易が盛んだった。琉球王朝時代である。その後この地は薩摩藩によって支配された。明治に入ると維新の改革によって沖縄は沖縄県となった。昭和になって第二次世界大戦に巻き込まれる。敗戦後はアメリカ軍政下に置かれるが、現在は本土復帰と目まぐるしく変遷しているが、沖縄人の不信感は恐らくアメリカ軍政以前の時期に対応している様に私には思われてならないのである。その間の事情が簡潔にまとめられているので朝日の切り抜きを再現させていただく。

—朝日新聞の切り抜き(天声人語)より—

沖縄県の南風原(はえばる)町が南部戦跡を文化財として保存し、後世に伝えようとしている。

沖縄戦の最中、病院などに使われていた壕の多くはつぶされ学校や住宅が建っている。だが遺骨と共にそのままになっている壕も十二、三はある。そのいくつかを保存する計画だ。この一帯の病院壕には当時の女子中学生たちが救急看護隊として参加した。血とウミとウジムシとシラミの中で一日八十人の手術を手伝った少女もいた。若い人たちのために沖縄戦の一端を書いておきたい。沖縄戦の性格の一つは「本土決戦に備える時をかせぐため」のものであったことは、当時の沖縄守備軍司令官、牛島中将も認めている。結果的には本土決戦の捨て石として住民は闘った。米軍の戦史でも、たとえば伊江島で、は乳のみ子を背負った婦人まで戦闘に参加し、住民は竹槍、手投げ弾、弾薬箱をかかえて米軍陣地に突入したと書いている（太田昌秀「これが沖縄戦だ」）海軍の現地指令官大田少将は自決直前の電報に書き残している。「若キ婦人ハ率先軍ニ身ヲ捧ゲ砲弾運ビ挺身斬込隊スラ申シ出ルモノアリ看護婦ニ至リテハ軍移動ニ際シ重傷者ヲ助け輸送力皆無ノ時黙黙トシテ雨中ヲ移動スルアリ、最後ニ「沖縄県民カク戦ヘリ」といふ有名な言葉がある。沖縄師範男子部の生徒は386人が戦闘に参加し、224人が戦死した。県立一中は371人が参加し210人が戦死した。男子生徒の戦死者は1224人、女子生徒の戦死者は計336人といわれている。全体では計12万人の県民が死に、約6万6千人の将兵が死んでいる。本土に生きるものは沖縄で流された血から目をそむけるわけにはいかない。南風原町は町の条例で戦跡を保護することを考えているという。沖縄戦跡を国の史跡として指定するには難しい議論があるだろう。だが戦争の歴史を大地に刻み込むという発想は大切にしたい。

一年前の沖縄行のレポートでは、沖縄の人達は東京や大阪などの大都会の人たちのように、ギスギスしたところがなく、大ようであり、車の運転なども大変にゆとりのある運転をしている。と書いたが、二度目の沖縄行きでは、これに加えて島の方々の明るさとたくましさを感じたのである。現在でも日本にある米軍基地の75%はこの狭い沖縄に集中していて、本土の人達は沖縄県民の犠牲の上にぬくぬくと暮らしている。やはり朝日の天声人語は沖縄を旅行する若い、戦争を知らない世代の人達に知っておいて欲しいと思うのである。

金環食の年、1987年は2泊3日の短い沖縄行きであった。9月21日の午後、沖縄に着く。クロトン、ハイビスカスなど熱帯の植物が我々を迎えてくれる。短い滞在ではあっても、沖縄の持つエキゾチックな雰囲気は琉球王朝時代の名残りなのであろうか。日食の前日、中心線に近い万座毛にあるグランドの下見に出かける。快適な観測地である。その内に段々、情報も集まって来る。海洋博の跡地に四国天文協会が入るらしい。ミュキビーチには東京理科大学とピクセン、万座毛にはNHK、ムーンビーチは川崎天文同好会などなど、沖縄の日食中心線付近だけでも2000人の天文アマチュアと観光客が集まって来るらしい、その上沖縄ではこの年、第42回国民体育大会が開催されていた。沖縄への航空機の便も大変な混雑ぶりだ

った。国体側の人達から見たら、何もこんな時に日食など起きなくてもと思われたに違いない。

ところで日食前日の天候は極めて悪かった。一面の曇り空の上に時に激しい雨に襲われた。日食中心線上でリハーサルをしていたセミプロのグループが雨のためリハーサルを中断するハメになった等というニュースも伝わって来る。この日ムーンビーチホテルと都ホテルで、それぞれ”金環日食について”の題目で講演した。雨の中でこの雨が台風起因したものだったら二、三日は天候の回復は望めないが、台風のニュースは入っていないから、明日は何とか持ち直すのではないか。シンガポールなみにスコールに見舞われる危険があるから、望遠鏡などの機材をスッポリ包み込める大きさのビニールシートを用意しておく等、何とも氣勢の上がらめ集りだった。

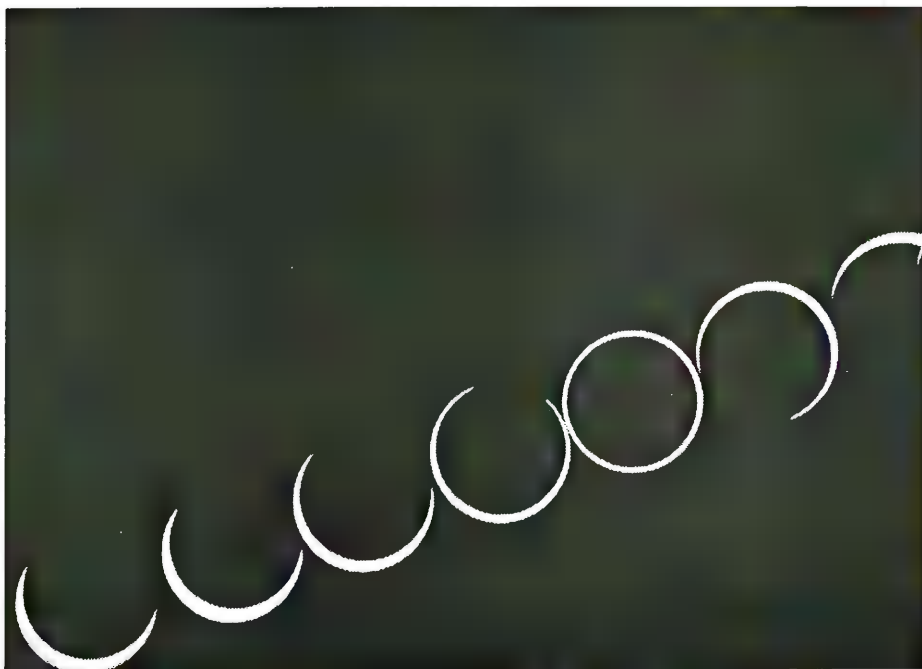
それでも夜に入って星が見え始めた。23日早朝、私達は更に南の平和記念公園に向かった。美しく整備された公園である。日本交通公社ツアーの我々を含めて約120名が沖縄の南端に集まった。11時25分、沖縄の青い空を背景に金環日食の美しさを十分に味わうことが出来た。後で見た気象衛星”ひまわり”の写真では沖縄周辺だけポツカリと晴天域が広がっていた様に思われてならない。マブニの丘、資料館などを慌ただしく見物した後、夕刻の日本航空便で帰国した。今回の日食ではゆっくりとその経過を観察することが出来た。それにつけても思い出されるのは29年前の種ヶ島で経験した金環食のことである。この時私は太陽の周縁減光の光電測光を担当していたから、薄暗い観測小舎の中で3時間40分の間、記録計の描く日食曲線を見つめていたのである。



観測風景

私とは観測地が離れているが、故・田中 心一氏の連続写真がその後、送られて来ているので氏の思い出としてここに挿入する。データとしては1987年9月23日 撮影地 沖縄県琉球村127度 46.4分 E、26度 25.4分 N。左から右に11時16分20秒、18分30秒、20分40秒、22分50秒、25分0秒、27分10秒、29分20秒。タムロン8/500mm、ND400+ND1.8、コニカカラーポジISO100、リコーXR-Sボデー、中心線より約12.6km南 田中 心一。氏とは1976年オーストラリア日食、1980年アフリカ日食、1983年インドネシア日食に御一緒させていただいた。私の古い天文仲間の一人である。

この原稿を書き終えた今日-6月23日-は沖縄の慰霊の日であると、ニュースは報じていた。再び沖縄にこだわるならば、どうしてこの日が国の慰霊の日でありえないのだろうか。



1987.9.23沖縄金環日食連続写真 撮影/田中 心一